

まえがき

この本は、私やけのはらが、マガジンハウスの雑誌『POPEYE』に、二〇一二年四月から二〇一八年四月まで連載させていただいたコラム「文化水流探訪記」を中心として、その連載の内容とも共鳴する部分がある、他の媒体で書かせていただいたコラムを併せ、一冊にまとめたものです。

私は一人っ子だったこともあり、子供のときから、一人遊び、趣味に没頭するようなところがありました。興味を持つと、脇目もふらず熱中してしまいます。しかし、凝り性であり、飽き性、その仕組み、大まかな世界地図が分かってしまうと途端に飽きてしまうのです。

しかし、音楽、映画、そのほか創作物の世界は、古今東西、様々な作品が一生かけても触れられないほどの数、存在し、また時の経過により自分の興味や理解度が変わることによっても、同じ作品もその表情を変えます。そして、本格的に理解するためには、自分で実際に作ってみることにあります。そうになると、これはまた大変な話で、作っても作っても次々に新しい未知の領域が出現し、分からないことだらけ、今のところ全く飽きることがありません。そのよ

うに、昔も今も、次々と色々なもの、人、作品に、熱中している私が、「何か連載をしませんか」とのお話に、すぐ浮かんだアイデアは、その研究成果の発表、偉大で広大な「文化水流」を辿るというものでした。

熱中しやすい人の中にも、様々なタイプの人がいると思われれます。その研究を一人で黙々と楽しむタイプ。また、その研究成果を「こういうのもあるよ」とか、「これ面白いよ」とか人に伝えたくなるタイプ。私はきつと後者のお節介なタイプなのです。そして、そのお節介の集大成が、この本です。

雑誌での連載中に、ある年上の方から（揶揄の文脈ではないのですが）「あの連載、大変だよね、効率が悪いよね」と感想をいただいたのを覚えています。確かに、一回で一二〇〇字弱のコラムを書くために沢山の調べ物をしなければなりません。音楽アルバムや関連の本なども入手が可能なものは入手し、時間の許す限り、聴いて、読みました。好きな人を取り上げているわけなので、出来るだけ誠実にその対象に向き合いたいですし、先ほど書いたように、根本的にお節介行為ですので、せめて、ちょっとでも意味のあるお節介にしなければならぬからです。

また、私のことを知っていて、興味を持ってくれている人だけしか面白く読めないようなものは嫌だなという気持ちもありました。どこまで達成できていたかは分からないのですが、非力なりに、非力だからこそ、そのようなことを思いながら連載していました。

話は一度それます。今、素晴らしい音楽を作っている「A」という人が居たとします。しかし、「A」さんが、その作品物の構造、テーマ、作法、発想を、ゼロから全て作り上げたわけはありません。むしろ、5%か10%、もしかしたら1%かもしれないかもしれませんが、私達が思っている以上に多くのものが、実は過去からつながり積み上げられた歴史の上に成り立っているのではないのでしょうか？ 音階、楽器、発声法、そのアンサンブル、もし、本質的な面で50%の要素が新しい音楽があったとしたら、それは一聴では、耳に馴染まない、とても突飛な音楽になっているはずです（現代音楽などは、既存の構造の借り物から逸脱する志向があるので、ポピュラー音楽より独創的な要素が多いかもしれません）。100%オリジナルな音楽というのが存在したとすれば（既存のものと100%違うものを想像することは、未知の次元、未知の観念を実感できないようになり困難なことです）、それはもはや、聴いた人から音楽と思われたいはず。なぜなら、既存の音楽と重なる部分が全く無いのですから。

たまに「携帯電話は使わない」という人や「パソコンは使わない」という人がいます（それが悪いと言っているわけではありません）。ですが、「車に絶対に乗らない」という人や「電車で絶対に乗らない」という人、「電気を絶対に使わない」という人に、私は会ったことがあります（もちろん、どこかには、いらっしやると思いますが）。で、何を言いたいかというと、「人は、自分が生まれたとき、物心ついたときにあったものは疑問を持たずに受け入れるが、その後の変化に対しては、抵抗を抱く場合がある」ということです。別の言い方をすれ

ば、あくまでも自分の立脚点からの視点だということに無自覚に、自分の育った時代、環境をベースに、「ベーシックな状況——あたりまえ」を規定し、ものを考えるということです。レコード録音された音楽、を聴くという状況が初めてできたときに、生演奏以外は認めないという人はきつと多かったです。しかし、定着してしまえば、当たり前前に受け入れるのです。

この本の中で、取り上げた対象は、二〇世紀に活動した人が多いように思います。つまり過去の話です。しかし、昔を懐かしんで、昔は良かったという話をしたいわけではありません。昔話をしたいわけではなくとも、新しいものが良い、時代は、生活は、文化は、全ての面で良くなっていると思っているわけでもありません。じゃあ、なんなんだと言えば、はぎれの悪い、見出しにはならない回答ですが、ある面では良くなり、ある面では悪くなっている、としか言いようがありません。それは私達を取り巻く生活でも同じことかもしれません。他県に住む知り合いに会いに、徒歩で三日かけて行くわけにはいかないですが、リゾート施設ができる前のビーチは、今よりずっと水が澄んでいたことでしょう。

実際の物事は、敵と味方がはっきりと区別されたエンターテイメント映画のように単純なものではなく、あいまいで複雑なものなのです。つまり、物事を少しでも理解し全体として少しでも良い方向に向かうように（良い割合が増えるように）願い、出来る事を頑張るしかないのです。

この本は、文化の歴史を辿ることにより——一〇〇年前を知ることにより、一〇〇年後を想像するような、過去に未来を探しに行く試みです。二〇世紀ノスタルジア、二〇世紀レクイエム、かつ、文化信仰であるこの本——私の壮大なお節介の塊、が、何か新しいものに興味を持つきっかけになったり、新しい発想、発見のきっかけになったとしたら、それほど嬉しいことはありません。

いつかの何処かの、すべての若者、すべての元若者、すべての今でも何かを探してる人たちにこの本を捧げます。